

能美郡辰口町における消費生活の変遷(昭和60年度卒業論文要旨)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5306

能美郡辰口町における消費生活の変遷

竹原裕美

従来の地理学において消費行動に関する研究は膨大な蓄積をみてきたが、これらの研究は商品購入のみに視点を置くものがほとんどで、消費生活全般について扱ったものはあまりなく、中でも農村地域の消費形態を研究したものは少ない。そこで本稿では石川県能美郡辰口町を事例として、生活に必要な物資をどのように入手してきたかをききとりを主体に調査し、大正時代から現代に至るまでの消費形態の変化を明らかにした。

辰口町は手取川扇状地の南端の一部とその南に続く丘陵地帯とから成るが、その商業機能において、有力な中心地を持たない地域である。周囲を鶴来町、寺井町、川北町などに囲まれ、古くから手取川扇状地上の市町村と多くの関係を持ってきたが、商業的機能の大部分をこれら周辺地域に依存してきたといえよう。町村合併等、歴史的人為的要因、及び自然的要因によって、辰口町内の各集落ごとにその依存の形態は異なり、歴史的にも変化してきたが、大きく分けて三つのパターンになる。すなわち、鶴来町寄りの集落と寺井町寄りの集落、及び小松寄りの集落である。しかし、農村社会における消費生活は、少なくとも高度成長期以前までは生活に必要な物資すべてを商品として購入していたわけではなく、一部の品物については自給や物々交換がなされていた。また、行商の役割も大きく、現在も行われている所もある。

近年、辰口町は道路交通網の発達、自家用車の普及や、産業構造の変化とともに通勤など様々な面にわたり小松、金沢との関係が強化されつつある。このことは、ききとり調査の補足として一部の集落でアンケート調査を行ったが、その結果からも明らかとなった。